

## 本物と偽物

### 【聖書】エレミヤ書 28章1～17節

その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の五月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが、祭司とすべての民の前でわたしに言った。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轡を打ち砕く。二年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカドネツアルがこの場所から奪って行った主の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰らせる。また、バビロンへ連行されたユダの王、ヨヤキムの子エコンヤおよびバビロンへ行ったユダの捕囚の民をすべて、わたしはこの場所へ連れ帰る、と主は言われる。なぜなら、わたしがバビロンの王の轡を打ち砕くからである。」

そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。預言者エレミヤは言った。「アーメン、どうか主がそのとおりにしてくださるように。どうか主があなたの預言の言葉を実現し、主の神殿の祭具と捕囚の民すべてをバビロンからこの場所に戻してくださるように。だが、わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」

すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた。そして、ハナンヤは民すべての前で言った。「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツアルの轡を打ち砕く。」そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。「行って、ハナンヤに言え。主はこう言われる。お前は木の轡を打ち砕いたが、その代わりに、鉄の轡を作った。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、これらの国すべての首に鉄の轡をはめて、バビロンの王ネブカドネツアルに仕えさせる。彼らはその奴隷となる。わたしは野の獣まで彼に与えた。」

更に、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」預言者ハナンヤは、その年の七月に死んだ。

### [序]神の言葉に聞き従う信仰

私たちは神を、目で見たり、手で触れたり、あるいはラジオから流れてくる声のように耳で聞いて確認することができません。しかし聖書は「**神ご自身が私たちに言葉をもって語りかけて、ご自分を明らかに示して下さい**」という信仰に固く立っています。

神はモーセにこう約束なさいました。「わたしは彼らのために同胞の中から、あなたのような**預言者を立てて、その口にわたしの言葉を授ける**。彼がわたしの命じることを、すべて告げるであろう」(申命記 18:18)。

こうして神は、預言者を通して御心を明らかに示して下さるようになりました。ですから旧約聖書には多くの**預言者の言葉**が記されています。そしてその言葉が、**歴史の出来事**としてどのように具体的に現わされたかを記しています。

神は最後に、**イエス・キリスト**によって御心を完全に、そして**決定的**に現わして下さいました。イエス・キリストは、言葉や業だけでなく、その生き様と死に様のすべて、すなわち**全存在**をもって、神の言葉を明らかに語って下さいました。このイエス・キリストによって語って下さっている**神の愛と救いの言葉**に**応答**して生きていく**信仰**が、私たちの信仰です。

エレミヤは南王国ユダがバビロン帝国に滅ぼされる**激動の時代**に、紀元前626年頃から約50年にわたって預言活動をしました。神は「あなたが生まれる前から諸国民、諸王国の預言者として決めていたのだよ」とおっしゃって、青年エレミヤを**預言者**にお召しなりました。しかし彼は神からの**任命書**なるものを持っていません。**預言者の本物か贋物か**を、どこで知るかが今日の主題です。

## [1] 歴史から正しく学ぶ大切さ

エレミヤ書の26章をご覧ください。ヨヤキム王の治世の初めに、彼はエルサレムの**神殿の庭**で、主に命じられた言葉を語りました。するとエレミヤはたちどころに**逮捕**され、裁判にかけられました。その理由は「この**神殿**がシロのようになり、この**都**は荒れ果てて住む者もなくなる」と主の名によって預言したからです。

**シロ**はカナンの地に定住したイスラエル共同体が、神の幕屋を据え、後に**神の宮**を建てた地です。その神の宮で少年**サムエル**(初期の代表的預言者)が大祭司エリに育てられました。しかし後にペリシテ軍によってシロの神の宮は破壊され、**神の箱**は奪われました。BC1050年頃のことです。ダビデ王の時代になって神の箱はエルサレムに戻り、息子のソロモン王が豪華な**神殿**を建てて、その聖所に安置されました(BC958年)。そしてエレミヤの時代まで約360年間、神殿はその威容を誇ってきたのです。

その間に北**イスラエル王国**はBC722年にアッシリア帝国によって滅ぼされました。更にBC688年にはアッシリアの大軍が攻めてきて、エルサレムを包囲しました。**ヒゼキヤ王**は預言者**イザヤ**に祈りの助けを要請すると共に、自分自身も粗布をまとって神殿に入り、懸命に祈りました。すると突如18万5千の大軍が混乱に陥り、アッシリア王は引き揚げていきました。小さな南王国が**奇跡的に救われた**のです。

そこで人々は「この**神殿**がある限り、**神の民**は**護られる**」という思いを強く持つようになりました。丁度日本の歴史でも、鎌倉時代に**蒙古の大艦隊**が北九州に襲来しましたが(**元寇**)、二回とも激しい台風によって船が沈められ退却して行きました。そして私たち日本人の心に、「いざという時には**神風**が吹いて護られる**神の国日本**」という**神風信仰**が植え付けられたのによく似ています。

エレミヤはその**神殿信仰**の聖地に立って「わたしはこの神殿をシロのようにし、この都を地上のすべての国々の呪いの的とする」と主の名によって預言をしたのです。人々が**激しく怒った**のは当然でしょう。戦時中の日本が甦ります。

しかしこの時南王国には、まだ公正な判決を下す裁判官と、それを支持する人々がいました。そして「**エレミヤには死に当たる罪はない。彼は我々の神、主の名によって語ったのだ**」という判決を下したのでした(26:16)。その理由は「あの奇跡的にエルサレムが護られた時にも、**預言者ミカ**がエレミヤと同じ預言をした。しかしヒゼキヤ王はミカを殺さなかった。かえって**ミカの預言を聞き入れて、主なる神に恵みと憐れみを祈り求めた**。もしもエレミヤを**偽預言者**だとして殺せば、**神の裁き**が我が身にもたらされる」というものでした。

こうしてエレミヤの預言は**本物**と判定されました。裁判官が、時流や人心に惑わされず、過去の**歴史から正しく学んだ**からです。しかし裁判がいつも**真実**に行なわれるとは限りません。26章の終りには、エレミヤと全く同じ預言をしていながら**預言者ウリヤ**は殺されたと記されています。**命をかけて真実を語る本物**、歴史に学ぶことによって**本物と贋物**とを見分けることの出来た**少数者**。26章は今日の私たちに、とても大切なことを教えてくれています。

## [2]ハナンヤとの対決

次はエレミヤ書**28章**、**ハナンヤとの対決**です。これは26章から**10年以上**も後のことです。この10年の間にヨヤキム王からその子のヨヤキンに代わりして3ヶ月後、王以下高官たちが**バビロン**に捕えられ、連れて行かれました。**第一次捕囚**(BC597年)です。そして南王朝**最後の王ゼデキヤ**の代になっていました。

預言者ハナンヤが神殿で語りました。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは**バビロンの王の轡を打ち砕く**」(28:2)、そして**2年**のうちに、バビロンに連れて行かれた前の王ヨヤキン(エコンヤ)以下のすべてを**帰還させる**というのです。人々は喜びに沸き立ったことでしょう。

しかしエレミヤは直ちに**反論**しました。「アーメン、そうになったらどんなによいことだろう。**だが違う**。主はこうおっしゃっておられる。「わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。**平和**を預言する者は、**その言葉が成就**するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」(28:7~9)。

その時エレミヤは主のご命令で、**木の轡**を作って自分の首にはめ、それに綱をつける格好をしていました。エレミヤの反論にハナンヤは感情が激したのでしょう。**エレミヤの首から轡をはずし、力一杯に打ち砕いて**人々に言いました。「主はこう言われる。わたしはこのように、**2年**のうちにあらゆる国々の首にはめられている**バビロンの王ネブカドネツアルの轡**を打ち砕く」。エレミヤは何も言わず

沈黙したまま、その場を立ち去りました。

首に木の轆をつけたおかしな格好のエレミヤと、その頑丈な轆を手で打ち砕いて見せたハナンヤ。ハナンヤの方が力強くいかにも頼もしい本物の預言者のように、人々の目に映ったことでしょう。しかし言葉なく引き下がって来たエレミヤに、主は再び言葉をお与えになりました。そこでエレミヤはもう一度ハナンヤと対決したのです。そして最後にこう言いました。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前は**この民を安心させようとしているが、それは偽りだ**。それゆえ、主はこう言われる。『わたしは お前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうち**に死ぬ**。主に逆らって語ったからだ」(28:15~16)。預言者ハナンヤは、2ヶ月もしないうちに死んでしまいました。

昔神がモーセに「預言者を立てて、その口にわたしの言葉を授ける」とお約束なさった時に「わたしの命じてないことをわたしの名で勝手に語る預言者は、**死なねばならない**」(申命記 18:20)とおっしゃいました。その通りになったのです。神の名で自分勝手に語ることは、死に値する重い罪だと言われています。恐ろしいことです。

神の名によって語るということは**命懸けのこと**なのですね。ハナンヤも預言者の自覚を持っていました。その責任の重大さは、よく承知していたはずですが、それがどこでどう誤ってこのような**厳しい裁き**を招く結果になったのでしょうか。

### [3] 国を滅ぼす賈物

ハナンヤとエレミヤの対決はゼデキヤ王の治世**第4年の5月**とあります。そしてこの年から5年後の**治世第9年10月**には、エルサレムがバビロン軍に包囲され、1年半後の**治世第11年5月**に落城し王国は**滅亡**してしまいました(BC587年)。国が滅びるとは異常な大事件です。その滅亡が間近に迫っているのです。国が内側で**深く病んで**いたからに他なりません。

日本も日中戦争が泥沼に陥ると、無謀にも戦線をアジア・太平洋全域に拡大させました。そして70年前の**1945年8月15日**に日本の歴史始まって以来の**敗戦**という悲劇を味わいました。6年前の8月にTVのNHKスペシャルで、**海軍の中枢にいた士官**たちから集めた証言が放映されましたが、アメリカ相手に戦争しても勝てないという意見は見られませんでした。敵が態勢を整える前に叩きつぶせという作戦に専念していたようです。

海外諸国を見聞する機会の多い海軍士官たちが、どうして**アメリカと日本の国力の違い**を正しく判断出来なかったのでしょうか。私の父は10年間アメリカ生活を送り、大学で学びアメリカの会社で働きました。そこで日本がアメリカ相手に戦争を始めるや、「馬鹿なことをして。負けてしまう」と申しました。軍国少年だった私は「何を言っているんだ」と腹を立てて聞いていました。父は戦局が悪くなるや憲兵隊に逮捕され、半年間拘留されました。

私は戦後30年、初めて米国へ行った時、太平洋上を航空機で10時間以上も飛行して西海岸に着き、更に6時間飛んでもまだ東海岸に届かない**アメリカの遠さと広さに驚きました**。どうしてこのような国と戦争して勝てると思ったのか、**軍人たちの愚かさ**にあきれました。そして、父の言葉が心に響きました。

**無条件降伏**した1945年だけみても、3月10日夜の東京大空襲で下町は焼け野原となり、一夜にして10万人の市民が死にました。6月沖縄地上戦では市民を含む25万人が死にました。8月6日には原爆一発で45万の広島市が廃墟になりました。そして9日には二発目の原爆降下が長崎に。

それでも**陸軍**は勝つ戦力を保有していると主張して、**降伏に強硬に反対**しました。そして8月15日の午後に陸軍大臣は切腹自殺、宮城を護る近衛兵が師団長を軍刀で斬り殺しています。私たち国民も**神風が吹いて最後には勝つ**と信じ込んでいたのです。まさに正常な判断が出来ない**狂気**が人々の心を支配して、国が滅びるのですね。国を護るべき軍隊が、愛国心を掲げて国を滅ぼしました。**贖物が国も我が身をも滅ぼす**のです。

聖書教育の教案に、**福島原発事故調査委員会の報告書**の一部が紹介されています。私たちは東日本大震災の被災者を覚えて、礼拝の度に祈り続けていますので、皆さん、是非お読み下さい。「**想定できたはずの事故**が何故起ったのか。その**根本的な原因**は、日本が高度経済成長を遂げた頃にまで遡る。政界・官界・財界が一体となり、国策として共通の目的に向かって進む中、複雑に絡まった『**規制の虜**』が生まれた。

ほぼ50年にわたる一党支配と、新卒一括採用、年功序列、終身雇用といった官と財の際立った組織構造と、それを当然と考える日本人の『**思い込み**』があった。経済成長に伴い『**自信**』は次第におごり・慢心に変わり始めた。入社や入省年次で上り詰める『**単線路線のエリートたち**』にとって、**前例を踏襲**すること、**組織の利益**を守ることが重要な使命となった。この使命は国民の命を守ることより優先され、世界の安全に対する動向を知らながらも、それらに目を向けず、安全対策は先送りされた。」

エレミヤは神の言葉をこう語っています。「身分の低い者から高い者に至るまで、皆利をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、皆欺く。彼らはわが民の破滅を**手軽に治療**して、**平和がないのに、平和、平和と言う**」(6:13~14)。手軽に手当てをして、平和、平和というのは、**利をむさぼる心の仕業**だということです。ハナンヤはどうして**手軽な平和**を預言したのでしょうか。

預言者として、エレミヤに**ライバル意識**を燃やしたからなののでしょうか。彼と別の言葉で自分の存在を誇示したかったからか。人々の喜び求める言葉で、**人気や称賛**を得ようとしたかったからでしょうか。

王国がまさに滅びようとしている時です。耳に快い言葉を聞く時ではないはずです。神の裁きの言葉を聞いて悔い改め、神の憐れみをいただいて、再生すべき時のはずです。その時に人に取り入って語ろうとすることが、預言者にとっては利をむさぼることだと、エレミヤは言ったのでした。彼は自分の内にもある利をむさぼろうとする心と、生涯必死に戦い続け、神からのみ言葉のみに集中して語ろうとしたのでしょ

### [結] 悔い改めることの難しさ

平和がないのに平和・平和という偽りの預言者を生んだのは、手軽な治療を求める聞き手の責任でもあります。このままでは滅んでしまうぞと、自分の病んでいる姿を直視させる厳しい言葉を嫌い、甘い言葉を求める大衆の責任でもあるのです。神は、私たちに決して迎合なさいません。滅びの道から取り戻し、命を与えるために、私たちを打ち砕き、悔い改めて立ち直らせようとなさいます。私たちは、厳しい裁きの言葉をこそ、求めて聞く勇気が必要です。

ヨヤキム王の世にエレミヤが神殿崩壊を預言した時に、100年前のヒゼキヤ王時代の歴史に学んで、エレミヤを本物と正しく判断した 26 章の裁判の記事も、大切な教訓を与えてくれます。神の言葉は歴史の出来事として具体的に現われます。語られた神の言葉を歴史の出来事に見出していく信仰の大切を痛感します。

神は、預言者を通して御心を明らかに示して下さいました。旧約聖書は、多くの預言者の言葉と、その言葉が歴史の出来事としてどのように具体的に現わされてきたかを記しています。そして最後に神は、イエス・キリストによって御心を完全に決定的に現わして下さいました。その証言が新約聖書です。

ですから今日の私たちは、旧新約聖書全巻を通して神が私たち一人ひとりに語りかけて下さる言葉を聞いていく信仰に立っています。先週私たちは、聖書のみで固く立って宗教改革を行ったマルチン・ルターの信仰を学びました。皆さん、聖書によって神の言葉を聞き取り、聖書によって神の言葉を語りましょう。語られる神の言葉が本物か贋物かも、聖書によって判断していきます。私の説教も聖書によって贋物か本物かを吟味なさして下さい。

神の名で安易な平和を語ったハナンヤは急死しました。彼の死を目の当たりにして、どうしてゼデキヤ王も祭司たちも人々も、エレミヤの預言を本物と認めなかったのでしょうか。アッシリヤの大軍に包囲された時、ヒゼキヤ王は王衣を裂き、粗布を巻いて神殿にこもり悔い改めの祈りを捧げたのです。ゼデキヤもどうして悔い改めなかったのでしょうか。

29 章をご覧ください。人々は依然として安易な平和の言葉を求め続けエレミヤの厳しい預言を嫌っています。そして遂に滅亡を迎えてしまいました。これほど私たちは、悔い改めることが出来ない者なのですね。甘い言葉が好きなのですね。だからこそ神さまの厳しい言葉を聞き続けなければならないのではないのでしょうか。

主イエスは、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」とお命じになっています。すべての人が福音を必要としているからです。悔い改める者に、命と喜びと希望を与える神の言葉・福音を語っていきましょう。人の好む言葉ではなくて、神の本物の言葉を語って参りましょう。

祈ります： 主なる神さま、あなたのお言葉を、私たちは聖書から聞き取ります。イエス・キリストの十字架に現された罪の裁きの厳しさと、赦しの愛の深さを真剣に受けとめる者にしてください。私たちは、つい甘い言葉を求め勝ちです。悔い改めへと導く厳しい言葉を、進んで聞く者にしてください。本物と偽物をしっかり見分ける信仰をお与え下さい。そして悔い改める者に命と喜びと希望を与えるあなたの言葉・福音を宣べ伝える者にして下さい。私たちの教会は新しい歩みを踏み出そうとしています。祈りを合わせて踏み出していく幻をお与え下さい。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン